

## 心の中に焦点を結ぶ『災害記録における立体画像』

黒田 克夫

それでは、私、黒田克夫から「あの大地震」の時のこと、そして「あの光景を記録した3D立体画像」のことをお話します。

あの日、3月11日は仙台市中心部にある東北電力の1階ギャラリーで、私が写真を教えていた専門学校の学生達と開く写真展の初日でした。前日までに準備を整え、当時は午前中に搬入と設置。午後からようやく展覧会開催という段取りで、展示も終えて、会場を見渡しほっとしていた頃、東日本大震災が起きました。

周囲を襲う轟音と揺れ。人々の叫び声。そして、停電。もう展覧会どころではなく、学生達や周囲の安全を確認して、それぞれ連絡先や帰路は大丈夫か、などを話し合い、ようやく会場から外に出てみると、皆が道路の中程に出て、薄暗くなった空から降り出した雪を見上げていました。

確かに、今までに経験したことのない揺れでしたから、繰り返し警告されてきた宮城県沖地震が遂に来たか、というのが最初でした。しかし、たどり着いた車の中で点けたラジオから流れてきたのは、大津波が起き、仙台市の海岸に多数の遺体が、という放送でした。次々に流れてくる断片的な情報からも、これは未曾有の大地震が起き、大津波があったことが分かりましたが、あの当時は「何か大変なことが起きている」が「どうなっているかは分からない」というのが、当地にいた私の正直なところでした。

どうしたらいいのか分からず、寒さと動揺で全身の震えが押さえきれないあの日の夜、思い浮かんだのは、私の出身地・石巻のことでした。海の近くで生まれ育ったので、本当に海は身近な存在でしたし、海鳥の声や潮騒の香り、なにより豊かな海と、そこで暮らす知人達の顔が浮かんできました。

その石巻も大津波が襲ったはず。私の頭の中にある「ふるさと石巻」の景色がどうなってしまったんだろう、みんな大丈夫だろうか、と思い浮かんでからは、もういてもたってもいられない気持ちでした。写真家としてよりも、一人の人間として、故郷の景色がどうなってしまったのか、自分の目で確かめたい、と強く思ったことを覚えています。

しかし、現実には皆さんご存じの通り、翌日からは停電と断水、ガス停止、と様々なインフラがストップし、ガソリンも入れられない状況が続きました。私も、はやる気持ちはありながらも、水道水の配給に並び、食べ物を確保するのが日課とならざるを得ませんでした。車にガソリンを入れることが出来て、ようやく出立の準備が出来たのは、3月の下旬になってからでした。

早朝に仙台を出発し、車で石巻を目指しました。途中、震災で崩れた建物やブルーシートが掛け

られている家々を目にして、あれだけの揺れだったのに、建物は意外と耐えたんだ、などと思っていたのですが、海岸線が近づき、津波の被害に遭った地域に近づくと、景色は一変しました。まさに、カーブを曲がった途端、峠を越した途端、想像を絶する別世界が広がっていたのです。

「なんだ、これは。なんだ、これは」という台詞が頭の中をぐるぐると周り、正直、私は言葉を失いました。

目の前にあるのは、潮の香りもなく、風の声だけが耳を叩く、音のない世界で、死臭ともいうべき匂いが漂う異空間です。海岸線にあった防風林の松林はなぎ倒され、周囲にごろごろと転がったまま、かつての田畑は砂に覆われ、風に乗って私の足元をさらさらと砂が流れていきます。それは、まるで、声なきうめきのようなでもありました。

それまで、車に撮影機材を積んでいた私は、現地を撮影するぞ、という意気込みがあったのも事実です。記録しなければ、という使命感のようなものがありました。しかし、現場に立った時、撮影するのが良いのかどうか、などというものではなく、撮影そのものが出来なくなったというか、もの凄い無力感と耐え難い精神状況になり、ただただ、立ち尽くすのみだったのです。これだけの未曾有の災害が起き、多数の死者がでた現場で撮影することの意義とでもいうべき「言い訳」が見つからない精神的苦痛だったと思います。

そんな時に浮かんできたのが、3月11日の展覧会に来てくれるはずだった友人の顔です。あの日の夕方、展覧会の会場で会う約束をしていた、女川町の写真館の主である佐々木夫婦です。写真館ごと津波に呑み込まれ、消息不明となり、未だに行方不明のまま。

ああ、もう少し早会う約束をしていれば、もしかしたら…。

日本有数の写真技術を誇った佐々木氏の、写真に対する情熱と真摯な姿勢。それは、私にとって大きな刺激であり、切磋琢磨する関係でもありました。大げさかも知れませんが、その彼が、もしかしたら、そっと背中を押してくれたのかも知れません。

自分の持てる表現技術で、目の前の現実はどう向き合うのか、誰かが「あの光景」をきちんと記録というか、脳裏に焼き付けておかなくていけないんじゃないか、と改めて自分自身の立ち位置について思いを巡らせることとなり、それまで、立ち止まったままだった、私の決意を新たにしてくれたのです。

月が変わって、2011年の4月。3D立体写真で「リアルな光景」を撮影するという目的で、私は被災地を回りはじめました。

4月から始まり、5ヶ月後の8月10日頃まで、私は時間とガソリンの許す限り、沿岸の被災地を回りました。東は女川町から、南は亘理町まで、私が見たものを撮る！という気持ちに、ぶれが無かったわけではありません。途中で何度も、「もう無理かも」という台詞が頭をよぎりました。しかし、私の足はもう、立ち止まることはありませんでした。

今の自分にできること、そして、しなければいけないことは、この目の前の光景を、淡々と、そしてできるだけリアルな3D立体画像として記録することだけ。

そっと三脚を立て、機材をセットしてから、祈るような気持ちでシャッターを切る。その繰り返し。それこそが、私ができる唯一のことでありました。

長々と私の「あの日」を語ってきましたが、それは、私が感じた「あの光景」を記録した3D立体画像を、今になってから、見る度に、まざまざと「あの光景」が頭の中で再生されるからです。それは、映像だけでなく、あの日の風の音や匂い、足元の感覚までも脳内で再生されるほどです。

確かに思い出したくなく出来事ですが、忘れてはいけないのも事実です。

日々、様々な新しい情報が流れ、復興に向けて数多くの多方面からの取り組みが行われておりますが、私の撮影した3D立体画像を、出来れば現地で、現在の復興が進む様変わりした土地で、あの時と今を見比べながら、そっと頭と心の中で「あの日の光景」の焦点を結んでもらいたいと思います。

何が起きたのか、それを知る。それこそが、私の視線であり、思いであることをお伝えして、私、黒田克夫のお話とさせていただきたいと思います。

## ●3D立体画像の写真説明

画像はアナグリフ方式です。原版はカラーで撮影しましたが、色が付くことで過剰な情報が付加するのを避けるため、あえて、モノクロの表現にしております。

色のない画像だからこそ、脳内で立体画像として焦点を結んだときに、それぞれの体験と想いで、あの光景の際の、音や匂いをイメージできるのではと思いますし、何が起きたのかを体感するきっかけとなると信じています。

# 東日本大震災



3D

2011年04月21日 撮影

宮城県東松島市大曲

左方の大型貨物船は津波で流された

© K.KURODA



震災後・2011.04.06撮影・Google



2D

## Profile

黒田克夫 Katsuo Kuroda



気仙沼市大島・小田の浜

## バイオグラフィー

- |             |   |
|-------------|---|
| 1949年       | 宮城県生まれ  |
| 1973年       | 黒田スタジオ設立  |
| 1985年       | (社)日本広告写真家協会入会  |
| 1998年       | NHK 放送技術研究所の次世代テレビ開発用素材(写真素材制作)<br>『スーパーハイビジョンテレビ』 走査線 4360 本 |
| 2005年～2011年 | 日本デザイナー芸術学院仙台校 写真・デジタルフォトコース 講師                               |
| 2005年～2008年 | NHK 東北プランニングにて 3D 映像事業担当                                      |
| 2009年～      | (株)ビジュアル コミュニケーションズにて東北エリア 3D 担当                              |

## 主な作品展、出展

- |          |  |
|----------|--|
| 1997年9月  | リアスアーク美術館『コモンホール』気仙沼市 『ピンホールカメラ写真展』  |
| 2001年11月 | 仙台市文化財展(仙台市博物館)<br>日本最大級の立体写真展示(1500×2000mm)アナグリフ方式  |
| 2005年2月  | 超望遠 7,330mm ピンホールカメラ製作 (8×10in サイズ)<br>日本最大級・仙台放送 TV ニュースで放映                                   |
| 2008年4月  | 世界ピンホール写真デー (11人参加)  |
| 2009年7月  | 国際天文年参加(部分日食撮影) 6,400mm ピンホールカメラ製作<br>富谷町成田にて  |
| 2011年3月  | 東北電カグリーンプラザにて学生と写真展(3D 写真展示)<br>(ハヤブサが撮影したイトカワの 2D～3D 画像、ハリケーン・カトリーナ、<br>ヴァイキング 1 号が撮った火星の表面等) |

その他、個展及びグループによる作品展を多数行う。

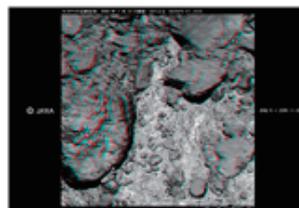
## 主な受賞歴

- |       |                                  |
|-------|----------------------------------|
| 1984年 | APA 展入選                          |
| 1986年 | 第 6 回 NAAC 展入選『日本タイポグラフィ協会部門』    |
| 1989年 | 第 7 回 NAAC 展入選『東京グラフィックデザイナーズ部門』 |
| 2002年 | 2001 年度 宮城県芸術選奨受賞・美術部門           |

主なイベント、メディア関連

- 1997年2月 NHK 総合テレビ『針穴の光で街を撮る』  
東北6県にて放映 NHK では初めてのピンホール番組
- 1997年8月 エコみやぎ'97 気仙沼&本吉『森と海のワークショップ』  
『ピンホールカメラ撮影体験』参加人員 48名
- 1997年10月 仙台放送『今、きらめいて』30分番組・東北電力提供  
『時を写すカメラ』東北7県にて放映
- 1998年8月25日 東北放送『ぐらまらず火曜館』『話題/ピンホールカメラ』生出演・60分番組
- 1999年11月 富士写真フイルム(株)インスタント写真部 インスタント写真倶楽部にホームページ開設  
誰でも簡単に作れる(ピンホールカメラの世界)
- 2008年7月19日 宮城県高等学校写真連盟+JPPS 東北支部 ピンホールカメラ製作・撮影  
4×5in フィルムの空き箱使用(76台製作)2時間で製作  
フィルムはインスタント(レギュラーサイズ、カラー)  
参加人数 76名
- 7月20日 10,300mmのピンホールカメラ製作(8×10in)2時間で製作  
撮影フィルム(B&W 8×10in ポラロイド ISO-800)  
日本で最大
- 2008年7月23日 ミヤギテレビ(ピンホールカメラに挑戦)OH!ハンドス 15分  
佐藤宗幸氏と製作・撮影(JPPS 東北支部長として出演)宮城と岩手で放映
- 2008年9月13日 東日本放送TV(るくなす)30分(ピンホールカメラ)  
JPPS 東北支部長として出演 東北6県で放映
- 2008年10月11日 東北放送TV(ふしぎのトピラ)30分  
レンズがない!ふしぎなカメラ  
JPPS 東北支部長として出演  
カメラオブスクラ製作(2700×1800×1800mm)東北7県で放映(新潟県を含む)
- 2010年11月27日 仙台市シルバーセンター『プロから学ぶ写真のコツ』
- 2009年5月迄 ピンホールカメラワークショップを開催 参加人員 1,500人以上  
日本針穴写真協会 東北支部長

3D 画像



ハヤブサが撮影したイトカワの近接画像